Bulletin of Aichi Univ. of Education, 73（Humanities and Social Sciences）, pp. 75 − 83, March, 2024

「わたくしは自分自身をシンドラーのリストに書き入れた」
―ヒルデ・ベルガーとロゼ・ベルガーの物語り―（Ⅵ）

ラインハルト・ヘッセ * 編著
舩尾 日出志 **　城田 純平 ***　今泉 尚子 **** 訳

* フライブルク教育大学元教授
** 名誉教授
*** 人間環境大学講師
**** 早稲田大学大学院生

"Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste":
Die Geschichte von Hilde und Rose Berger.（VI）

Reinhard HESSE*,
Hideshi FUNAO**, Junpei SHIROTA*** and Naoko IMAIZUMI****

**Hauptstrasse 23 CH-8280-Kreuzlingen/Bodensee, Switzerland*
***Professor Emeritus of AUE, Kariya 448-5542, Japan*
****Full-time Lecturer of University of Human Environments, Okazaki 444-3505, Japan*
*****Graduate student of Waseda University, Tokyo 169-8050, Japan*

序

舩尾は友人の哲学者ラインハルト・ヘッセ先生より，2014 年 9 月に 1 冊の本（"*Ich schrieb mich selbst auf Schindlers Liste. Die Geschichte von Hilde und Rose Berger*" Haland ＆ Wirth im Psychosozial-Verlag, Gießen 2013）をご恵贈いただいた。意外にも哲学書でなく，艱難辛苦のナチス時代をかろうじて生き抜いた 2 人のユダヤ人女性ヒルデとロゼの半生に関するものであった。そしてその本の大部分は 2 人の女性自身の回顧録およびインタビュー記録から構成されている。目次は次のようになっている。

導入
　ベルトホルト・バイツによる序言
　ヘッセ先生による序文
Ⅰ　ヒルデ・ベルガーの物語り
　テキスト 1「ヒルデ・ベルガーが自身の人生（1914 − 1945）を語る」
　テキスト 2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」
　テキスト 3「ハロルド・ツィリンおよびマリー・ツィリンのヒルデ・ベルガーとの対話」
Ⅱ　ロゼ・ベルガーの物語り
　テキスト 4「マリー・ツィリンのロゼ・ベルガーとの対話」
　テキスト 5「クラレンス・マクリモンドのロゼ・ベルガーとの対話」
ヘッセ先生による結語にかわる書簡

この第 6 報はテキスト 2「マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対話」の一部の翻訳である。このテキストは，ニューヨークのジャーナリストで，そしてヒルデと夫，アレックス・オルゼンの友人であるマーク・スミスが 1978 年 6 月に 3 日連続でヒルデ・ベルガーにたいして行ったインタビューの記録である。マーク・スミスはここでヒルデ・ベルガー（・オルゼン）に 1914 年の出生から 1935 年までの人生にまつわるさまざまな出来事について尋ねた。そのテキスト 2 は原著の 59 頁から 118 頁であるが，第 6 報では 75 頁から 89 頁までのおおよそ 14 頁分を翻訳している。

このような対談ではありがちであるが，いろいろな話題が次々に出てくる。重複もある。時間の流れに厳格に沿った展

開はみられない。とはいえヒルデ自身が語る政治的人間としての育ちの4段階，つまり①シオニズム，②シオニズム・社会主義，③共産主義ないしスターリン主義，④トロツキー主義という流れはふまえられている。第6報では基本的にはシオニズムの段階におけるヒルデの体験が語られている。しかし対話の流れのなかで，ナチス政権成立前後の状況も話題になる。

ヒルデが通っていたリューツェウム（女子高等学校）の教員と教育内容（特に歴史教育）の反動性には驚く。ワイマル共和国における中等学校は総じてナチス台頭に貢献したのだろうか。またハインリッヒ・ハイネが書いた「ローレライ」をナチスは，政権奪取後のことだが，強引に「作詞者不詳」としていたという事実に呆れた。これもまた，ナチス独裁が何でもできるということを，当時の人々に思わせたエピソードである。1929年5月1日の血のメーデー事件など興味深い事柄が言及されている。さらに父親との宗教論争，とりわけ安息日に関する論議は興味深い。じっくり読んでいただきたい。

なお，ヘッセ先生及び出版社より日本語への翻訳，および愛教大研究報告における発表の許可をいただいている。《　》は原文にある補足説明であり，【　】内は訳者による補足ないし注釈である。

キーワード：1929年5月1日（1. Mai 1929），中世的に狭い宗教世界（die mittelalterlich enge, religiöse Welt）

Ⅰ　ヒルデ・ベルガーの物語

2. テキスト2　マーク・スミスのヒルデ・ベルガーとの対談（1978年6月19日～21日）

（承前）

マーク：お話しいただいている第1の時代で，他に覚えておられることが何かありますか？

ヒルデ：他に，わたくしは音楽を思い出せます。みんなが街や学校で歌った流行歌を。それらの歌の大部分はアメリカの流行歌のドイツ語バージョンであることに，わたくしが気づいたのは，ようやく後のことです。例えば，わたくしは，「よりによって，バナナ（Ausgerechnet Bananen）」という歌はドイツの流行歌であると信じていました。しかしそのオリジナルは「そう，わたしたちにはバナナがない（Yes, we have no bananas）」というアメリカの曲なのでした。楽しい，昂ぶる気持ちを覚えています。若い人々が風変わりなメロディーに合わせて，奇妙な，神経質なダンスを踊るのを見ました。わたくしはたまたま耳に入ってきたどのようなメロディーも，傾聴し，そして覚えました。わたくしは家族のなかで音楽的にもっとも素質がありました。わたくしのきょうだいたちの誰も，美しい声あるいは特に良い耳を持っていませんでした。後日，わたくしはささやかな音楽教育を受けました。わたくしは学校のコーラス部で歌い，そしてそこで学んだ歌を家でも歌いました。しかしわたくしは父が欲した歌も歌いました。何より金曜日の晩に－イディッシュ語の「Nigunim」を，つまりわたくしがシナゴーググループにおいて学んだユダヤのメロディーを歌ったのです。父はわたくしの歌唱に誇りをもっていました。親戚の人たちの訪問があったときには，父はわたくしがその人々のために歌うことを望みました。

マーク：どのような歌ですか？

ヒルデ：例えば「Oifn priptchik brent a faierle」【“Oifn priptchik” は「ユダヤの民族歌」の意】です。そしてそのような種類の歌です。

マーク：「Roginkes mit Mandelekh」【「アーモンドと葡萄」】はどうでしたか？

ヒルデ：確かに，わたくしはその曲を歌いましたし，そして大好きでした。さらに，わたくしは，一日中働かねばならず，そして仕事から帰ったとき，子どもたちがすでに寝ているので，子どもたちと一緒にいられない父親についてのユダヤの歌をまだ覚えています。後に，青年運動のなかでは，わたくしはもちろんドイツの民衆の歌，放浪の歌，自然の歌等を歌いました。

マーク：あなたはいつ演劇あるいは映画に出会いましたか？

ヒルデ：演劇についてはかなり後のことです。映画は，わたくしたちは本当に大好きでした。我が家からそれほど遠くないところに，小さな，みすぼらしい映画館がありました。わたくしたちはその映画館を「蚤映画館」（Flohkino）と呼んでいました。わたくしは映画を観るためのお金をいつも両親に必死にせびらなければなりませんでした。ドイツの映画とアメリカの映画を観ました。わたくしにとって，それはいつも大きな出来事だったのです。

マーク：チャーリー・チャップリンの映画も観ましたか？

ヒルデ：はい。しかし当時わたくしは意味を理解していたとは思いません。愉快な場面で笑うだけで，その深い意味を理解していませんでした。理解したのはずっと後日，成人してからのことです。ハロルド・ロイド，スタン・ローレル，オリヴァー・ハーディ，そしてもちろんバスター・キートンを覚えています。

わたくしの父は劇場にも映画館にも行かなかったです。しかし母は，わたくしはそのように思っているのですが，もし時間とお金があったなら，喜んでもっとベルリンの文化生活に参加したでしょう。しかし母は4人の子どもを育てなければならず，そしてお店の世

話をしなければなりませんでした。我が家は洗濯と掃除をするお手伝いさんを雇っていました。しかし母はかの女に料理はさせませんでした。というのは，母は，お手伝いさんが例えば食器を指示通りに別々に保管しないのではないかと心配したからです。それゆえ母は自分で料理をし，そしてお菓子を焼きました。母はひじょうに優秀で，そして誠実な主婦であり，したがって非ユダヤの隣人たちは，我が家にやってくると，いつも，「なんてきちんとしているの」と驚きを表明しました。ひょっとすると「汚いユダヤ人」というイメージと真逆だったのかもしれません。毎週，安息日前の木曜日の晩に，母は翌日早朝まで料理をし，そしてお菓子を焼きました。というのは，母は金曜日にはお店にいなくてはならず，そして安息日に台所で働くことは許されなかったからです。それゆえ，すべては事前に準備されなければならなかったのです。わたくしたち子どもは母をあまり手伝いませんでしたし，そして母も手助けを求めませんでした。したがって，母には外出する時間はあまりなかったのです。母の唯一の休養および気分転換は，友人や親せきを尋ねること，および訪問してもらうことでした。

母の親戚はベルリンには一人もいませんでした。母のすべての縁者はポーランドで生活していたのです。一人の姪だけが例外でした。かの女は母を頼ってベルリンにやってきて，そして自身の結婚までは，わたくしたちと一緒に暮らしました。母はかの女を結婚させ，そしてかの女に結婚資金を持たせました。母のその姪が我が家を去った後，お手伝いさんが雇われました。母は助けを必要としたのです。お手伝いさんの雇用は，当時それほどの出費ではなかったのです。母は公式には学校教育を受けていませんでしたが，しかし精神的にひじょうに活発で，そしてベルリンで起こるあらゆることに興味を持ちました。

マーク：それで，お母さまはドイツ語を読むことができたのですか？

ヒルデ：はい，できました。そしてわたくしは，母がどのようにしてドイツ語を学んだのかをお話することができます。母には多くのきょうだいがいました。母方の祖父はガリツィア地方の小さな都市の，わたくしはその都市はストルィーイだと思っていますが，製粉業者でした。母は学校に通っていました。何年間学校に通ったかは知りません。しかしポーランド語はよくできました。父はブロークンなポーランド語とブロークンなドイツ語しかできませんでした。父はいつもイディッシュ語【ドイツ語とヘブライ語とスラブ語の混合語，中欧ユダヤ人の間で広く使用された】を話していました。母はドイツ語もかなり上手に話しました。母は，わたくしが何かを読んでいるのを見るといつも，わたくしは母に似ていると言っていました。すでに幼い少女のとき，母はドイツ語で書かれたあらゆるものを読んでいたのでしょう。包装紙あるいは破れた本の頁，新聞の一部等，ようするにすべてを読んでいたのでしょう。かの女は，わたくしはそう思っているのですが，おおよそ10人ないし11人のきょうだいと一緒に1つの部屋で寝ていました。そして晩には，本を読むために，ベッドの横に1本のロウソクを立てました。その後，母は実家を去り，そして富裕な，ユダヤ人家庭の料理人として働きました。

マーク：そのことはすでに，お聞きしています。

ヒルデ：かつてベルリンにユダヤ人の演劇グループがありました。グループの名称は「ハビマー」です。それはヘブライ語で「ディブク」という作品【ディブクは東欧のイディッシュ文化において信じられる悪魔憑きを行う悪霊のことである】を演じました。

マーク：それは有名な上演でした。

ヒルデ：はい，その通りです。「イードになるのは大変だ」（Es ist schwer zu sain a Jid）というタイトルの戯曲を上演したイディッシュ語の演劇グループも覚えています。母はわたくしをそれら2つの公演に連れて行ってくれました。大きな出来事でした！

マーク：「ディブク」は理解できましたか？

ヒルデ：そうですね。ヘブライ語はできませんでした。とはいえ，どういうことが話題になっているのかは分かりました。わたくしはヘブライ語でお祈りすることができ，そして文字を読むことができました。しかし意味は分かりませんでした。後に，シオニズム運動のなかで，わたくしは現代ヘブライ語《Iwrit》を学び，そしてもっと分かるようになりました。イディッシュ語の戯曲については，わたくしはすべての言葉が分かりましたが，とりわけ印象深かったのは，イディッシュ語の表現力でした。わたくしは，両親が家でイディッシュ語を使っているとき，嫌でした。わたくしたちはイディッシュ語の話し方をほぼ軽蔑していました。それはわたくしたちには「ダメダメ」ドイツ語のように思え，そしてそもそもわたくしは，ドイツ人の友人が我が家を訪れ，そして父がほとんど笑ってしまうような話し方で語るのを聴くのは，恥ずかしいと思えたのでした。

マーク：何歳から，「アーベントハイム」のためにシナゴーグに行かれたのですか？

ヒルデ：8歳か9歳でした。

マーク：そしておおよそいつ頃，「アーベントハイム」にシオニズム的傾向があるとお分かりになったのでしょう？

ヒルデ：おそらく11歳か12歳でした。「アーベントハイム」では，わたくしたちに良書に注目させようとされました。ちなみにベルリンの民衆学校における教育はその点ではあまり良くありませんでした。年上の若者たちの指導のもとで，わたくしたちは本を読み，そしてその後，その本について話し合いました。後日，

わたくし自身もまたそのようなグループ指導者になりました。

マーク：ユダヤ的テーマの本を扱ったのですか，それともドイツ的テーマの本を？

ヒルデ：両方です。それ以外に，わたくしたちはユダヤの宗教教育を受けました。そしてしかも特別な宗教学校で。そのことをお話したことがありましたか？

マーク：まだお聞きしていません。

ヒルデ：わたくしたちの住居から遠くないところに，ユダヤの宗教学校がありました。それが，わたくしたちの神殿に属していたのかどうかを，わたくしは存じません。しかし確認しようと思えばできます。ここ《ニューヨーク》で出会ったある女性に尋ねることができるからです。かの女もまた当時，その学校に通っていたのです。さて，いずれにせよ，わたくしたちは週に2度か3度午後にその学校に行きました。わたくしたちは宗教教育を受け，さらに祈禱を理解できるように多少ヘブライ語を，そしてユダヤの歴史を，つまりユダヤ民族の歴史を学びました。

マーク：学校でトーラーを読みましたか？

ヒルデ：はい。もちろん読みました。一方の頁にヘブライ語のテキストが，そしてもう一方の頁にドイツ語のテキストが掲載された旧約聖書の版が存在しました。ですから，わたくしたちは，自分たちが何を祈っているのかを知りました。

しかし「アーベントハイム」に戻りましょう。わたくしがおおよそ12歳だった頃，わたくしは学校で聞いたことがない本の存在を知りました。民衆学校でもリューツェウムでも。わたくしは初めてヴァサーマン，ハインリヒ・マン，トマス・マン，アルノルト・ツヴァイク，シュテファン・ツヴァイクのような作家たちについて耳にしました。それゆえ同時代のドイツ文学を初めて耳にしたのです。それによって，わたくしにとって新しい世界が開かれました。わたくしは初めて反戦本を読みました。例えばレマルクの『西部戦線異状なし』やアルノルト・ツヴァイクの『グリシャ軍曹をめぐる争い』です。それはわたくしの愛読者ではないとしても，好きな本の1つです。わたくしがそれらの本を読んだとき，すでに少し年齢を重ねていました。わたくしはまた【フランスの作家で平和運動家であった】アンリ・バルビュスの『放火』を読みました。そしてその他の本も読みましたが，すぐには思い出せません。

マーク：あなたがおおいに感銘した感動した最初の本について何か思い出を持っていますか。

ヒルデ：わたくしがおおいに深く感動した最初の本は『グリシャ』であり，もちろんさらにレマルクの本もそうでした。わたくしたちはそれらについて詳細に話し合ったことを覚えています。

マーク：あっという間に文学に魅了されていると感じたのでしょうか。

ヒルデ：はい，とりわけその種の文学は，わたくしにとってとてもとても重要でした。わたくしはそのような文学をもっと読むことを熱望しました。

マーク：みなさんは学校ではいったい何を読んでいましたか。

ヒルデ：学校では，わたくしたちは古典期の代表的人物を読みました。すなわちクライスト，シラー，ゲーテです。さらにヴィルヘルム・ラーベ，テオドール・フォンタネ，フランツ・グリルパルツァーを読みました。わたくしたちはハインリッヒ・ハイネのものはあまり読みませんでした。わたくしたちの学校はかなり反動的で，それどころか反ユダヤ主義でした。少なくとも教師たちの何人かは露骨に反ユダヤ主義で，そしてきわめて国家主義的でした。

ところで，このテーマのついでに申し上げますが，わたくしたちの体育教師は狂信的な排外主義者の女性でした。かの女は，学校全体が「在学ドイツ人協会」（VDA）という名の組織に加入させようと欲していました。そのことは，わたくしにはナチス・イデオロギーの始まりのように思われました。わたくしの同級生の何人かは，その子たちは特にVDAのなかで活動していたのですが，その後，ナチスの少女組織である「ドイツ少女同盟」にも加入しました。わたくしは当時，初めてナチスの宣伝に，例えばポーランドやズデーテン地方のドイツ人少数派の問題の宣伝色の強いでっち上げに，曝されていたと思います。わたくしは，自分自身がVDAに属さないリューツェウムの少数の少女の1人であったことを覚えています。その理由は2つありました。第1に，わたくしはドイツの公民ではなかったことです。そのことを，わたくしは論拠として持ち出しました。以前，わたくしはいつもポーランド国籍であることを恥じ，そしてそのことを秘密にしていたのです。両親はずっとポーランド国籍のままでした。2人はドイツ国籍を獲得しなかったのです。したがって，わたくしもまた，ドイツの法律に則って，ドイツで生まれたにもかかわらず，ポーランド国籍でした。そして第2に，その間に確かな政治意識を得ていました。わたくしはそのときおおよそ15歳で，社会主義思想を知り，そしてオープンに広めることを（しかもその反動的な学校の敵対的な環境のなかで）自分の義務であると感じていました。わたくしは級友たちと熱心にディベートを行いました。

その関連で，わたくしはまだある特別な出来事を覚えています。わたくしの級友の1人のことです。かの女は大柄で，魅力的で，ひじょうにドイツ人的に見える少女で，後には少女団におけるグループリーダーになったのですが，そのかの女から，わたくしは2冊の本をいただきました。ハンス・グリムの『土地なき民』およびエルンスト・ユンガーの『鋼鉄の嵐』でした。その2つの本のなかに，かの女は鉛筆でコメントを書

き込んでいました　－　すべてのコメントは情熱的で，そして賛意を示していました。かの女はわたくしに，わたくしのような信念を持つほかの少女には決してそれらの本を与えないだろうと語りました。しかしかの女は，わたくしのことを好きであり，そして尊敬しており，そしてかの女は，わたくしがかの女が何のために戦っているのかを理解することを欲していたのでした。一度だけですが，かの女は次のように付け加えたことがありました。「あなたがユダヤ人であることは，とても悲しいです」。わたくしは後に，つまり戦争の時代に，ポーランドにおいて「同情」という似たような表現を聞きました。

その関係で，わたくしが学校におけるわたくしの最初の公然たる挑発的な抵抗の行為であるとみていることにも言及したいのです。わたくしは，第1次世界大戦についての歴史授業に参加することを拒否したのです。当時わたくしはすでに，どれほど歪められた仕方で，戦争の歴史と戦争の原因がわたくしたちに教えられているのかを意識していました。わたくしは公然と反戦の考えを擁護した唯一の生徒でした。ひじょうに多くのドイツとプロイセンの戦争のデータを暗記しなければならないことも，わたくしをうんざりさせました。というのも，それらの戦争に導いた背景，原因，ヨーロッパおける一般的な出来事について何がしかが，わたくしたちに教えられることがなかったのです。

よく覚えていますが，わたくしは一般的にクラスのなかで最優秀の生徒の1人でした。歴史，ドイツ語作文で優秀で，そしてとりわけ語学では才能がありました。わたくしたちの学校の校長先生は，わたくしたちの英語およびフランス語の授業を担当していました。そしてかの女（つまり校長先生）が，保護者あるいは他の教員と話をするためにクラスを離れる必要があったとき，わたくしはかの女の代わりを務めなければなりませんでした。というのは，わたくしはフランス語および英語ではクラスでもっとも優秀な生徒だったのです。それゆえ，わたくしは生徒としてかなり良い評判を得ていましたので，戦争史の授業に参加することを拒絶しても，罰せられませんでした。

マーク：あなたにとって，ハイネは何がしかを意味していましたか。その有名な，偉大なドイツの詩人がユダヤ人であることを知っていましたか？

ヒルデ：ああ，もちろん知っていました。とりわけ，わたくしたちユダヤの子どもたちを怒らせたのは，「それが何を意味するのかは，わたしは知らない...」というひじょうに愛されている詩と歌は　―あなたはおそらく「ローレライ」というタイトルでご存知でしょう　―　学校の教科書では「作詞者不詳」とされていたことでした。

マーク：本当に，確かですか？

ヒルデ：まったく本当のことです。わたくしははっきりと覚えています。わたくしたちはそのことを怒っていました。おそらくあなたもご存知でしょうけど，それはもっとも愛され，そしてもっとも美しいロマンリチックな詩の1つです。その詩には...（とりわけフランツ・リストによって）曲が付けられ，すべての児童・生徒が歌い，そしてライン川を行き来するさまざまな船の上で欠かさず歌われました。新たに作曲されることもありました。とうぜんメロディーは違っていて，それはもはや古い，ロマンチックなものではありませんでした。その新しい曲は際立って軍国主義的なリズムを有し，そしてナチスは行進に際して歌いました。ナチスは美しい詩を，それがハイネによるもの，つまりユダヤ人によるものであることを知らずに歌っていたのです。ナチスはハイネのことも知りませんでした。というのはその詩人はまさにいわゆる「不詳」だったから！

マーク：ヒルデさん。わたしはもう少々このテーマにとどまりたいです。というのは，それは絶対的に途方もないことだからです。あなたが「作詞家不詳」という言葉にであったのは，民衆学校においてでしょうか，あるいはリューツェウムにおいてでしょうか。

ヒルデ：そのようなことが学校の教科書に登場したのは，ナチスが権力に就いた後ですので，1933年以降のことです。わたくしは1931年に，つまり17歳でリューツェウムを卒業しました。わたくしが初めて「作詞家不詳」という言葉を見たのは，妹，ロゼの教科書においてです。ロゼはわたくしより4歳若く，そして同じリューツェウムに通っていました。

マーク：あなたがまだ民衆学校の児童であったとき，そのことをすでに知っていましたか？

ヒルデ：ああ，知っていましたよ。そしてわたくしは何度も歌いました。

マーク：あなたが「作詞家不詳」との言葉を初めて見たことで，あなたはナチスがどれほどのことができるのかを知ることになったと，わたしは推測します。

ヒルデ：ああ，たしかにそうでした。ナチスは1933年に権力を手に入れました。当時，わたくしは19歳でした。わたくしがいつそのような厚かましい嘘に気づいたのか，もう分かりません。しかしそれは熱い論争のテーマではありました。

しかし忘れはしません。ナチスがまた，まさに公然とさまざまな本を燃やしたことを。ユダヤ人著者の本だけではないのです。社会主義者やリベラル派の本を燃やしました。トマス・マンはユダヤ人ではありませんでした。ナチスはかれの本をすぐには燃やしませんでした。というのは，ナチスは当初トマス・マンを自陣営に引き入れようとしたからです。しかしハインリッヒ・マンの本，アルノルト・ツヴァイクおよびシュテファン・ツヴァイクの本，およびその他の著者たちの本は躊躇なく燃やされました。レマルクの本も燃や

されました。かれもまたユダヤ人ではありません。いま述べたすべてのことは一般的に周知のことです。わたくしが,「ローレライ」の作詞家が不明であると学童たちに教えられていることを知ったとき，同時にさらに驚くべきさまざまな事が進行していました。焚書やユダヤ人商店のウインドウへの投石だけではありません。すでにさまざまな人が強制収容所に送られ，迫害され，そして殺されるという事態もありました。

マーク：ユダヤ人は権利を剥奪され，政敵は監獄に放り込まれました。

ヒルデ：そうです。ナチス体制による完全なテロです。他のすべての政党の禁止。それら全部はナチス・イデオロギーに属し，そして今ではとてもイメージもできないことですが，現実になっていました。

マーク：それらの状況下では，お人よしでない，目覚めた人々，批判的な人々が，ナチスは何でもできてしまうのだということに気づくまで，それほど長い期間はかかりませんでした。

ヒルデ:わたくしはお人よしではありませんでした。

マーク：ヒトラーが語り，そしてかれの街頭での代弁者たちが説いたことのすべてを，実行することにもなるのでした。

ヒルデ：その関連で，わたくしはある歌を思い出します。その歌をナチスは街頭で歌っていました。わたくしは，SAがそこにいたと考えます。SSは街路では行進しませんでした。SAは突撃隊（襲撃部隊Sturmabteilung）でした。それはむしろナチスの大衆組織でした。SS（親衛隊Schutzstaffel）はエリートでした。その組織はより小さく，SSの隊員たちは慎重に選抜され，そしてよりしっかりとした教育を受けていました。SSの隊員たちはある確かな性格特性によって選び出されていました。すなわち忍耐および，党とヒトラー個人にたいする絶対的忠誠心です。SAには，ヒトラーが権力を掌握してから，日和見主義の人々も加入しました。そのことは，その人たちにとって有利点がありました。たとえばより容易に仕事を得ることができました。－不景気はまだ続いていました。それどころか当時，多くの以前の共産主義者あるいは共産主義に共感していた人たちがSAに加入しました。それはひょっとして正規の党員ではなかったかもしれませんが，とはいえ共産党に投票する人たちでした。ヒトラーが権力をえたとき，ドイツ共産党は250万票を得ていました。社会民主党はおよそ600万票でした（それらの数字は確認しないといけませんが）。それゆえ強力な労働運動が，つまりロシアと並んで，世界でもっとも強力な労働運動が存在したのです。しかし歌に戻りましょう。その歌詞を，わたくしは今なお覚えています。それはわたくしたちを驚愕させます。こんな歌詞でした。「そしてユダヤの血がナイフから滴り落ちると，いっそううまくいくのだ！」

マーク：「アーベントハイム」以降のあなたの成長についておおよそのところを教えていただけますでしょうか？

ヒルデ:万事はわずかな年数のなかでのことでした。わたくしはおおよそ2年間,「アーベントハイム」に属していました。そこには専門的な教育を受けた人々が，わたくしたちを世話してくれました。その人たちは，わたくしたちと遊び，そしてわたくしたちにユダヤとドイツのフォークソングやダンスを教えてくれました。わたくしは初めて同時代の反戦文学に触れ，そしてさらに社会主義文学にも触れました。当時わたくしは，おそらく12歳から14歳でした。14歳か15歳で，わたくしは，社会主義とは何かを意識するようになりました。少なくとも，わたくしはそのことを考えていました。

わたくしは特に，ある事件を思い出します。それはひじょうに悪評高い1929年5月1日です。ベルリンには当時，社会民主党員の警察庁長官がいました。かれの名前はツェルギーベルです。いいえ，警察長官はヴァイスでした。かれも社会民主党員でした。そして，わたくしはそう信じていますが，ユダヤ人でした。ツェルギーベルはプロイセンの内務大臣でした。【ここではヒルデ・ベルガーは間違っている。ツェルギーベルはベルリンの警察長官だった。ヴァイスはかれの職務代理者であり，そしてドイツ民主党（DDP）の党員だった。かれがユダヤ人であったというのは正しい。】プロイセンは社会民主党政権でした。共産党員と，すでに大きな運動になっていたナチスの間の街頭闘争が起こっていました。ツェルギーベルはベルリンにおける5月1日のデモンストレーションを禁止しました。流血を避けるためという言い分で。5月1日は労働者にとって，とりわけラディカルかつ階級意識をもった労働者にとってもっとも重要な日でした。そのような労働者たちはその日に，もちろん無給で，休みをとり，街路でデモンストレーションをおこなったのです。皮肉なことに，ナチス政権は5月1日を，1933年5月1日からのことですが，国家的祝祭日であると宣言しました。ナチスはその日を「国民労働の日」であると名づけました。その日は，以来，有給の休日となったのです。それは明らかに，ドイツの労働者を自分たちの味方にするための欺瞞的な策略でした。ナチス党の名称が「国民社会主義ドイツ労働者党」であったことを忘れてはいけません。

さて，ベルリンの労働者たちはいずれにせよ，社会民主党政府によって5月1日に街路から追放されることを想定していませんでしたし，そして禁止にもかかわらずデモを実行しました。デモ隊と警官の間で衝突が起こりました。とりわけ労働者地区であり，そして共産党の拠点であったノイケルン（ベルリン南東部に位置する地区）ではそうでした。共産党員はまたデモ参加者の最大部分を占めていました。警察と労働者の間

の衝突の結果は，31人の労働者が亡くなったという事実でした。ラディカルな労働者たちは長年，5月1日が有給の祝日であると宣言されるため闘っていました。その日はその労働者たちの階級闘争の象徴でした。多くの企業は労働者に休暇を与えました。ただし無給で。あくまで企業内の緊張を回避するためにですが。そして，その5月のデモンストレーションが社会民主党政府により禁止されたのでした！共産党員や左派社会民主党員たちの憤激を想像なさるかもしれません。広範な社会民主党員たちはそもそも消極的で，従順で，そして平和的でした。しかしそのような社会民主党員たちでさえ，自分たちの政府の措置を拒絶したのでした。

わたくしは当時15歳でした。そしてその出来事を確かに，かなり意識的に追跡していました。その出来事はわたくしに決定的な印象を与えました。わたくしは当時すでに社会主義的・シオニズムのグループにおり，そして共産主義の基本思想を意識していました。それどころか，わたくしは確かに，可能な限り多くのメンバーを共産主義の理念へと導こうとする下位グループに属していました。

マーク：したがって，あなたはもうシオニストではなかったのですか？

ヒルデ：そうです。もはやシオニストではありませんでした。わたくしたちは自分たちの立場を「赤い同化」と呼び，わたくしたちは赤い運動と同化していました。その際の基本的考えは，ユダヤ人のための社会主義のために闘うだけでなく，一般的に社会主義社会のために闘うということでした。わたくしの成長のその段階では，わたくしはもはや，社会主義的なユダヤ人社会のために闘うことでは満足したくなかったのです。社会主義的なユダヤ人社会のために闘うことは，社会主義的シオニストたちの関心事で，それゆえ社会主義的シオニストたちはユダヤ民族のなかでしか活動しませんでした。しかしそれでは，わたくしには十分ではなかったのです。わたくしはユダヤ人社会のなかで生活しておらず，ドイツ人のなかで，ドイツ人労働者のなかで生活していました。ドイツ人労働者を解放することを，わたくしたちは義務であるとし，そしてドイツ人労働者を，わたくしたちはわたくしたち自身の啓発に参加させたかったのです。そのため，わたくしはシオニズムから離反したのでした。

マーク：いつから，あなたは自身がもはやシオニストではないと感じたのですか？

ヒルデ：正確にお答えすることはもうできません。

マーク：後日，（スターリン主義的）共産主義者から離反し，そしてトロツキー主義者になるきっかけは何だったのでしょうか。

ヒルデ：意識の高い労働者たちのなかに実際に憤怒と暴動を引き起こしたあの忘れられない1929年5月1日への共産党の反応こそが，きっかけでした。ご存知のように，ドイツの労働運動はひじょうに強力でした。しかしすべての労働者が階級意識を有していたわけではありません。多くは労働組合員でした。労働組合は，より良い労働条件，より良い賃金について交渉しようとしていました。ドイツにおける強い労働組合を主導していた社会民主党のイデオロギーは当時，資本主義を改良すること，つまり「ゆっくりと資本主義から社会主義へと成長するよう」試みることでした。確かにそのような表現でしたし，そしてそれは革命なしに行われるべきとされました。少なくとも流血の革命なしに。その普及しており，頻繁に繰り返される言い回しは，わたくしは当時しばしば聞いたのですが，ある労働組合のタルノウという名の委員長によって作り出されました。（わたしはかれと，戦後にスウェーデンで私的に会ったことがあります）その言い回しは次のようなものでした。「わたしたちは資本主義の墓堀人ではなく，資本主義の医者でありたい」

マーク：素敵な文章，素晴らしい考え方ですね！

ヒルデ：少なくともドイツのあちこちで，それが成功したなら，素晴らしい考え方ということになりますね。しかしツェルギーベルおよび労働者利害へのあの裏切りにたいする共産党の回答に戻りましょう...

マーク：あなたが続きをお話なさる前に，1つ問いがあります。いったい何が，社会民主党政府に，5月1日のデモンストレーションを禁止させたのでしょうか。

ヒルデ：社会民主党は，さまざまな事柄が自分の手から滑り落ちてしまうかもしれないという不安をもっていました。なんといっても共産党が存在しました。その党員の数は確かに小さかったのですが，しかしその党は明確な路線を有していました。そしてその党は活発で，そして暴力にうったえる用意もありました。ナチスの運動も当時すでに根づいており，そして脅威となるような政治要因になっていました。社会民主党はワイマル共和国の（労働者階級にとってのそのさまざまな重要な達成のすべてとともに）持続性や安定性に不安をもっていました。共産党の愚かな回答は「ミニ・ツェルギーベルたちに出会ったら，殴りつけよう！」というものでした。言いかえると，あらゆる社会民主党員はわたしたちの敵だ！ということです。それはドイツ労働運動の分裂の最終的確定でした。そしてその分裂は，他のさまざまな政治的，経済的，社会的，および歴史的原因とならんで，ナチスがドイツにおいて労働運動（世界でもっとも強力な労働運動！）の側からの実質的な抵抗なしに権力に到達できた主要理由でありました。

しかし，先を急い過ぎました。シオニズムに戻りましょう。あなたは，わたくしがなぜシオニズムに引き寄せられていると感じたのかを知りたいのですね？

マーク：あなたは「アーベントハイム」における子どもでした。あなたにとって生活は素晴らしかったのです。そこでは，あなたの周囲にあるすべてはユダヤ的でした。しかしそのうちに，シオニズムのEmissäre（特定の秘密の使命を持つ使者）がやってきました。...

ヒルデ：... そしてそのような使者たちは，わたくしたちにディアスポラ（離散して他の民族・多宗教の国に住む少数派の人たちのこと，とりわけユダヤ人，またはその居住地域）におけるユダヤ人の苦悩について，そしてユダヤ民族の，つまり郷土を持たず，ノーマルな社会構造も有さない民族の歴史について語りました。

マーク：それをどのように受けとめましたか？あなたはベルリン，プロイセン，そしてドイツを自分の郷土であると感じていましたか？いずれにせよ，あなたは当時，幼い子どもでした。

ヒルデ：はい，自分の郷土であると感じていました。というか，ずっとそう感じていました。

マーク：そしてあなたは。シオニストから聞いたことをどのように受けとめましたか？

ヒルデ：そうですね，わたくしは，自分がユダヤ人であることを知っていました。わたくしは自分がユダヤ人であると感じていました。というのも，わたくしはひじょうに善良な，敬虔なユダヤ人によって育てられていたからです。たとえわたくしがそもそも金輪際好まない方向においてであろうと。わたくしは，そのことが，わたくしがシオニズムに心を引かれた理由でもあったと思っています。わたくしは，ユダヤ教はたんなる宗教以上のものであると感じていました。

わたくしのユダヤ人の友人たちの父親にくらべて，わたくしの父はもっとも頑固で，もっとも因習的で，そしてそもそも，ユダヤの戒律に従順であるという点でもっとも狂信的でした。わたくしは，「アーベントハイム」や近所の友人たちの家を訪問したときにことを覚えています。わたくしの父は，わたくしたちが何かを食べるか，あるいは飲んだりしたとき，いつも“broche”《祝福の言葉》を言いました。絶え間なく，わたくしたちは「それをしなさい！」と「それをするな！」という言葉を聞きました。父は，わたくしのユダヤ人の友人の1人が，例えば安息日に喫煙する，路面電車に乗る，電話に出る，電灯を点けたり消したりするというように，ほんの些細なことであっても，戒律に違反したと聞くと，その友人にただちに，戒律を無条件に守れと説教をおこないました。わたくしの母は父をなだめようとし，そして父をいつも伝道しているとたしなめました。それどころか，母は「あなたは神さまの警察官ではありません」とさえ言いました。しかしその言葉はまったく役に立ちませんでした。父は，出会ったあらゆる人を善きユダヤ人にすることが，自分の義務，自分の使命であるとみていました。

弟が後に，わたくしたちが政治的に活動していた頃のことですが，わたくしたちは結局のところ，父親とまったく同じように行動していると，わたくしに言ったことを思い出します。わたくしたちの独善的な説教とわたくしたちの，他者を導こう（わたくしたちのまさしくその都度の成長局面に応じてその導きの方向は社会主義だったり，共産主義だったり，あるいはトロツキー主義だったりした）とする試みのことです。

ついには，父のあら探しは，わたくしにとってうんざりさせるものとなり，だからこそ，わたくしは父と宗教について論争を開始しました。後には弟も加わりました。わたくしは父に，戒律は現代のために，つまりここ，ベルリンの今のために書かれたのではないと言いました。わたくしは，少女でしたが，安息日に点灯や消灯をしても決して罪ではありえないことを父に確信させようとしました。その他，父を確信させようとしたのは，その戒律は，火を起こすことが実際にまだ仕事であった時代に書かれたことであり，さらにわたくしがその関連において，神がなぜ「あなたは安息日には休息し，そして祈り，そしてわたしに奉仕すべきである」と言ったのかを理解したということでした。したがって，あなたはその戒律をもはや今，ここで，わたくしたちに説くことはできません！その戒律は今日の時代のために作られたのではありません。スイッチを入れたり，切ったりすることを禁じることができないのです。ですから，なぜあなたはわたくしたちにそのことを許そうとしないのですか？わたくしの父の答えは必然的に次のようなものでした。「そのように聖書に書かれている。聖書は逐語的に遵守されねばならない。疑問を表明することは許されない」。その最後の言葉はわたくしを激怒させました。その言葉はわたくしの知性を侮辱するものでした。わたくしは，なぜあれやこれをすべきであるのか，そしてすべきでないのかを知りたい少女でした。そしてわたくしが得た唯一の答えは，「疑問を表明するな！」でした。

わたくしは，ユダヤ教の祈りの意味を初めて知ったとき，まさしく激怒でした。とりわけ，あらゆる成人男性が，《Tefillin》（ユダヤ教徒の成人男性が祈祷時に身につける箱）を身に付けて，日々唱える祈りは。すなわち「神が，わたしを女性として創造なさらなかったことを感謝します！」その翻訳文を読んだとき，わたくしは10歳ないし12歳でした。わたくしは確かに婦人運動について何も知らなかったのですが，しかしショックを受け，そのことを父に言い，そして母に，そのことについてどう思うか，さらにわたくしと同じように受け止めたかどうかを尋ねました。母は答えました。書かれている通りであると。男は1日3回お祈りする義務があり，そして男が厳格にユダヤ教の掟に適う家庭を導く等を助けることが女性の役割であると。

マーク：あなたのお父さんはあなたの弟ともそのように話されたのですか？

ヒルデ：はい。まったく同じように。弟とわたくしはある時以降，いつも父と宗教について，戒律の起源について論争しました。姉はそれには加わらず，そして妹はそれに加わるには幼かったのです。わたくしたちは父を非難しました。皆に十分な知識がなかったポーランドでその戒律を遵守することはまだ理解できるが，1925年のベルリンでは事情が違っていると。それは，シオニズムがわたくしに別の展望を与えたポイントでした。（シオニズムにとって，ユダヤ教は単に古くなった宗教とは何か違ったものでであったから）

マーク：あなたがたはしかし，異なる考え方のユダヤ人たちとも出会いました。例えばシナゴーグにおいて。

ヒルデ：父は母およびわたくしたち子どもを連れて金曜日の夕方，安息日および祭日には必ず保守的なシナゴーグに行きました。しかしわたくしたちは弟の友人から，弟がそれ以外にさらに一人で，わたくしたちの地区の小さな，貧しい教区のシナゴーグに行っていることを聞いていました。そのシナゴーグには女性が入ることは禁じられていました。

マーク：それは面白い。しかしあなたは，安息日に，にもかかわらず点灯する信心深いユダヤ人を思い出せませんか。

ヒルデ：思い出せます。いく人か。それどころか，その人たちは安息日に労働をし，そして自分のお店を開けたままにしていました。

マーク：あなたの親戚にもそういう人はいましたか？

ヒルデ：はい。しかし宗教にたいするわたくしの姿勢に戻りましょう。わたくしはさまざまな制約に怒りをもつようになっていました。それらの制約はわたくしを些細な事で妨げただけでなく，わたくしにとって重要な要件においてもまた妨げたのです。わたくしの父はようするに，わたくしが，わたくしにとって重要な一定の事をなすのを禁じたのです。

マーク：例えば？

ヒルデ：例えば，わたくしはあるとき1週間のハイキングに行きたかったことがありました。父は許してくれませんでした。というのは，父はわたくしが安息日を尊重しないということを知っていたからです。さらに父は，わたくしが，家から離れると，ユダヤの掟に適っていない食べ物を食べるのではないかという不安を持っていたのです。父は，わたくしの友人のうちの何人かの両親がユダヤの掟に適う家庭生活を指導していないことを知っていました。父はわたくしが定まったいくつかの事柄を行うのを禁じました。したがっていつも諍いが起こっていました。

マーク：分かります。あなたがまだ幼かったとき，そのような制限を受け入れていたのでしょうか？

ヒルデ：そうです。1つ例をご紹介しましょう。ベルリンのユダヤ人共同体は市の郊外に，オストゼーの湖畔に，そしてドイツのその他の箇所に子どもたちのための夏休みキャンプ場を持っていました。貧しい子どもたちが都市から離れて，良い新鮮な空気のなかで，美味しい食事をしながら，そしてしっかりと教育された世話役たちの指導受けつつ，夏休みを過ごすことができるよう欲せられていたのでした。そのような保養ハウスは格安で，それどころかひょっとして無料でした。いずれにせよ，わたくしはそのような施設に送られました。およそ8歳ないし10歳の頃でした。

マーク：正統派で，そしてコーシャ食《ユダヤ教の掟に則って調理されてものしか食べない》でしたか。

ヒルデ：おそらく完全に正統派というわけではなかったでしょうけど，しかし確実にコーシャ食でした。そうでなければ，父はわたくしがそこに行くことを許さなかったはずです。

マーク：あなたがたは礼拝をしたのですか？

ヒルデ：はい。わたくしはそれどころか，礼拝を担当することを欲していました。わたくしはそこで「レベッツェ（Rebbetze）」《女性のラビ【“ラビ” はユダヤ教における宗教指導者】》と呼ばれていたことを覚えています。つまり当時，わたくしはまだ父を信じていて，そしてどのようなことも，父が正しいと考えるように行っていたのです。それは，わたくしが問い正すようになる以前のことでした。

さらに，父はわたくし以外の自分の子どもたちに比べて，わたくしを明らかにひいきしていました。もちろん弟は例外でした。かれは男の子であり，「主の祈りの語り手」であり，筆頭の地位にあったのでした。父は弟を誇りに思い，そして父が弟に注いでいた愛は，きっとわたくしに注いでいた愛よりも深かったのです。

マーク：あなたのお父さまがあなたをひいきしたのは，あなたがもっとも聡明だったからですか？

ヒルデ：いえ。弟がもっとも賢かったです。しかし父はわたくしに大いに期待してくれました。したがって，わたくしはとっても守られていると感じていました。わたくしは，愛されていることを知っていました。しかし後にわたくしを怒らせたのは，わたくしの懐疑にたいするいつも同じ父の答えでした。「疑問を表明することは許されない！」

（この項未完）

（2023年8月30日受理）